

満州の君が代

情愛に生かされて

阿南 君代

「満州の君が代」に寄せて

人間とは何でしょう？

子どもにそう訊ねられたら、

「人間とは、記憶ですよ」

そう答える事になっています。もし自己紹介をしてください、と言われれば、誰もがそれまでの良き思い出や頑張った昔の事、その中で知った自分の長所や得意な事を話すでしょう？

つまり、人間とは積み重ねてきた記憶そのもののなのです。

もちろん人間は忘れることが上手な生きものです。記憶、といっても忘れてしまったり、忘れてしまいたい記憶もあるものです。

一方で、決して忘れてはいけない記憶もあります。君代お母様は、そんな決して忘れてはいけない、君代お母様と縁を与えられた私たちが、未来へと語り継いでいかなければならない思い出を綴って下さいました。

昔、満州と呼ばれた中国東北部、そして朝鮮半島は、中国、ロシア、日本が入り乱れ、戦いを繰り返した歴史がありました。多くの人々が戦火に巻き込まれ、過酷な運命に翻弄されたのです。君代お母様の一家家族も、その渦中にいました。

1945年8月9日、既に日本の敗戦は決定的な状態でしたが、そこにロシア（当時のソ連）が参戦。8月15日に日本が米・英を中心とする連合国に降伏しても、ソ連の激しい攻撃は続き、敗戦国日本の国民を狙った中国朝鮮の人々の暴力や略奪も続きました。

そんな中で、どれ程の思い、ひもじさ、苦勞の果てに故郷日本を目指したのか。君代お母様の記憶に刻まれた一コマ一コマの物語は、当事者だけが語り得る真実です。そして強く思うのです。

君代お母様が残そうとして下さった物語こそ、平和へのボエムそのものだ。

戦中・戦後を生きて来た日本人。戦争の直接の記憶を持った方々が、地上から消えてしまふ時は必ずやってきます。私たちの子孫は、その当時を生きた人々の肉声に触れる事なく、日本人の一つの苦難の物語など、忘却してしまうかもしれません。

戦前から戦中、子どものことを「小国民」と呼びました。君代お母様は、歌の上手な朗らかで、誰とも仲良くなれるそれは素敵な小国民だったと、この一冊を読み進める中で、何度も微笑みが浮かびました。

そんな小国民、きいちゃんの心に刻まれた動乱の時代の物語。日本人が悲しみを乗り越えようとした、その物語。どんな時であれ、日本人らしく生き抜いた物語。

この一冊に籠められた君代お母様の『未来へ届けたい』その願いを、私たちは確かに受け取りました。

語り継ぎ、心に刻みつつ、より良い未来へと手渡して行かなければなりません。

多くの先達への感謝の思いと共に。何より君代お母様への万感の感謝を籠めて。

佐藤 芳子

目次

第一章 敗戦そして祖国への道

昔蘭店	2
終戦	2
暴動	3
小学校へ集合	5
講堂Ⅰ	6
講堂Ⅱ	7
大連へ	8
フランス人形	9
前線の看護婦さん	10
ピアノ	11
ロシアのキャピタン	12
さつまいも	14
ヤミ市で売ったもの	15
月のない夜に	17
食事	18
引き揚げ再開	18
内地へ近づいた	19
正月を寿ぐ	20
引揚船の中	21
茶筒人形（指人形）	22
内地へ着きました	22
祖母に会う	24
昭和天皇陛下の御巡幸	25

第二章 満州での日々、心に残る人々

馬の治療	28
若い兵隊さん	29
内地から大連港に着いた兵隊さん	30
中国のおじさんとおばさん	31
奉安殿	32
忠霊塔	32
中国語	33
中国の友達、口喧嘩	34
満州唱歌の時間	35
走って見に行った事	36
うーちゃん	37
大連の夕日	38
お菓子	39
栗まんじゅう	40
あとがき	41
君代の軌跡	42
編集後記	45

「中国のお葬式」

中国のお葬式があると子供達は大通りへ走って見に行きます。

泣くのが仕事の泣き女がワァーワァー泣くのです。大きな葬式になるほど泣き女の数が増えるのです。

うーちゃん

父の友人の中国の方は、よく家族でみえました。私の一歳上のうーちゃんとは大の仲良しでした。

父の手作りのブランコにかわりばんこに乗りました。うーちゃんが乗る時は私が「イー、アール、サン、スウ」と数え、私が乗る時はうーちゃんが「一、二、三、四」と数えました。

となりとの垣根が四季咲きの小さなバラの木だったので、花びらを摘んで、築山の上の平たい石のテーブルの上でままごとをしました。

中国語と日本語のチャンポンでしたが、とても楽しく過ごしました。別れる時は手のひらを二人合わせてパッチンと鳴らしました。

うーちゃんの名付け親は、父でした。



※「満州の君が代」本文より一部抜粋

馬の治療

前線で傷ついた馬は、小学校で治療をしたりリハビリをしたりしました。元気になる、又前線へ戻ります。

リハビリが終わる頃に、教職にいた父はよく馬に乗って帰ってきました。門を入ってすぐのアカシアの木に馬を繋ぎました。塀にのせた板の屋根の下に糞をいっぱい積んで馬の寝床にしました。

馬は朝早く砂利道を音高く帰りました。



若い兵隊さん

満州の前線へ向かう兵隊さんが大連埠頭に降りると、同県の若者を自宅で一泊持て成す会があったようです。

我が家には、大分県出身の若者が泊まりました。

その時は母が御馳走を作るので、私は嬉しかったものです。私には兄がいなかったの

と呼んで下さいました。

両手に栗まんじゅうを一個ずつのせてもらいました。おじさんは栗まんじゅうの箱を母に渡しながら、笑いました。

「お母さんにもらうと片手だけでもんな」

あとがき

幼かった私は、国政もよく解らなくて、若いお兄ちゃんが泊まるのを喜んだり、姉の前線の事をなにげなく聞いたたり、今にして思うと自分の至らなかつたことばかりです。情けなく心が痛みます。

八十年ほど前の事柄について記憶をたどりながら綴りましたので、思い違いなどもあるかもしれません。どうかお許しください。

沢山の方々に手を差し伸べていただきました。「ありがとう」では言い表せないほど深い感謝の念でいっぱいです。

八十七歳の初夏



庭のライラック

満州の君が代
情愛に生かされて

2025 年 2 月 6 日 発行

著 者：阿南君代

編 集：裕子、洋子、啓子

監 修：佐藤芳直

e-mail：manshujoai@gmail.com

イラスト・題字：孫 ゆりの

印刷製本

佐藤印刷株式会社

連絡先：〒305-0051 つくば市二宮4丁目4番地21号
電 話：029-855-7622



大連の花「アカシア」